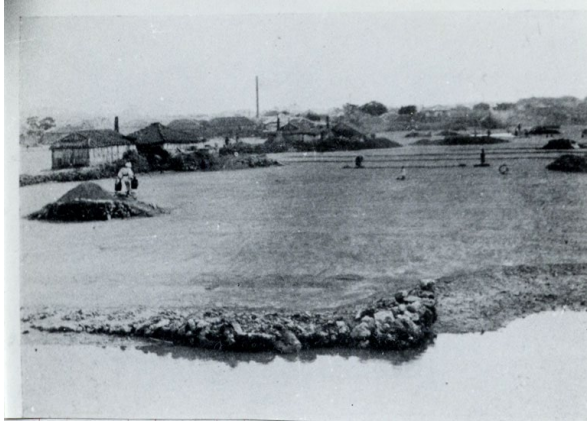


【岐阜女子大学】メタデータ項目と記述内容

	メタデータ項目	メタデータ記述欄
1	ID	
2	表題名	沖縄の怖い話
3	資料名	『仲西ヘーイ』／潮渡橋と塩田潟原
4	内容分類	郷土・歴史
5	索引語	沖縄、伝承、潮渡橋、塩田潟原、塩田、泊塩田之跡碑、怖い話
6	説明	<p>1. 潮渡橋について</p> <p>潮渡橋は、泊と那覇の間を流れる潮渡（すーわたい）川にかかる橋で、塩田潟原（かたばる）の上に明治 42(1909 年)に架けられた、長さ 7 間(約 13m)の木橋だった(東恩納寛惇『南島風土記』)。</p> <p>潟原は干潮時に徒歩で横断すると泊から若狭・那覇方面への近道になることから、人の往来の多かったようだ。現在の潮渡橋は那覇市前島のリッチモンドホテルのそばに移され、橋の上を国道 58 号線が通っている（位置は当時よりも南に移動）。</p> <p>*潮渡川は安里川が崇元寺付近から分かれて久茂地川となり、その先の美栄橋付近から海に向かって別れて流れる川である。</p> <p>2. 塩田潟原について</p> <p>塩田潟原とは、若狭・泊・久茂地の間に広がっていた砂汀地（さていち；みずぎわの砂地のところ、砂浜。）で、1451 年、国王尚金福の命により、崇元寺前の安里橋からイベガマにかけて長虹堤が築造されて以後、安里川の河口には泥土がたまり、次第に干潟になったとされて、その後、塩田になった。</p> <p>1883 年（明治 16 年）ごろの塩田の営業者は、那覇が 300 人と他の地域より多く、盛んであったことがわかる。18 世紀末頃成立の間切集成図には、「那覇塩浜」廻 21 町あまり、(約 63,000 坪)、「泊塩浜」廻 28 町あまり（約 84,000 坪）が並んで描かれており、明治 18 年(1885)年ごろ那覇市街のあたり一帯が「塩浜」となっている。また、泊港をはさんだ対岸にも廻 7 町あまり（約 21,000 坪）の塩浜があった。</p> <div style="text-align: center;">  </div> <p style="text-align: center;">那覇市前島の潟原塩田（那覇市歴史博物館 提供）</p>

<http://www.rekishi-archive.city.naha.okinawa.jp/archives/item3/83801>

3. 塩田潟原のその後

潟原は近世では製塩のほかに 1770 年頃古地区には「馬場」の文字もあり、調馬や砲術訓練などにも利用され、明治期にはアメリカ水兵と中学生との親善野球大会や飛行機のお披露目会、小学校の連合運動会など、多彩な行事の場としても利用されていた。

沖縄戦中から戦後にかけて潟原は埋め立てられて、現在、跡地である那覇市立那覇小学校（旧・前島小学校）の南側に位置する前島中公園内には「泊塩田之跡碑」（前島中公園；沖縄県那覇市前島 1 丁目 3）が設置されている。



circd084o-0015. jpg

4. 沖縄の塩田の歴史と塩専売法

沖縄の潟原での製塩業は、尚貞王（しょうていおう、1646-1709）〔琉球王国第二尚氏王統の第 11 代国王（在位 1669-1709 年）〕、1694 年に潮の干満を利用した入浜式製塩法（いりはましきせいえんほう）が、薩摩の弓削次良右衛門から塩浜芝香（しおはましこう、塩浜親雲上芝香）に伝授され、那覇市泊の潟原で始まったと伝えられている。潟原での製塩業は、明治・大正期が全盛であったといわれている。

琉球王国の中心であった浦添や首里と陸続きの泊港は、安里川の河口に位置した陸路・水路とも交通の便が良かったため、13～14 世紀にかけ宮古・八重山・奄美大島などの船も出入りし、賑わいを見せた港であった。

沖縄島で入浜式塩田が開始されたのは 17 世紀末です。康熙 33 年（1694 年）に薩摩の弓削次郎右衛門から製塩法を取得した宮城芝香（塩浜芝香、塩浜親雲上芝香）が那覇潟原に塩田を開き、これが沖縄で初めて塩田を使用した製塩となったとされている（外間・波照間 1997）。

この潟原の塩田には堤防もなく、河口域の干潟を利用し、潮汐によって海水を塩田に引き込む入浜式製塩法であった。早い時期から徴税対象になって

		いたようだが、アメリカ軍統治下（1945（昭和20）年～1972（昭和47）年の27年間）では塩の専売法がなく、沖縄の本土復帰（1972年）にともない、日本の専売法が適用されることになり塩の製造は廃止された。
7	形式	静止画(jpg)
8	氏名	撮影者：高見鈴乃
9	時代・年	撮影日：2024/
10	地域・場所	沖縄県那覇市松山2丁目13
11	利用条件	表示 4.0 国際(CC BY 4.0)
12	関連資料1	なし
13	権利者	岐阜女子大学
14	協力者	なし
15	登録日	2024/05/03
16	登録者	高見鈴乃
17	ファクトデータ	 <p style="text-align: center;">circd084k-0005. jpg</p>
18	*特色	<p>■潮渡橋に伝わる怖い話「仲西へーい」</p> <p>内容①</p> <p>あるときモーイ親方という人物が、真夜中に川で洗骨をしていた女の手助けをした。この女は仲西という妖怪であり、その後、提灯で暗がりを探らしてくれたり、「仲西へーい」と3回よぶと牛のような姿に化けて、すごい速さで目的地まで運んでくれたりと、恩返しをしてくれた。</p> <p>内容②</p> <p>仲西は那覇市に伝わる妖怪で、夜になって那覇と泊の間にある塩田潟原にかかった潮渡橋で「仲西へーい（仲西やーい）」とよぶと、「へーい」と返事が</p>

返ってきて現れる。現在、潮渡橋はかつてあった場所から移動しており、昔のように呼んでも現れなくなったようである。

内容③

「仲西」がどのような姿なのか、人物なのか実態のないマジムン(妖怪)なのかは定かではないが、夜分、潮渡橋の近くで「仲西へーイ」と叫ぶと、現れる。一度「仲西」を呼び出してしまうとさらわれ、正気を失くしてしまう。潮渡橋辺りで神隠しにあう人が多発していた。人が神隠しに遭うと、近所の人たちが大勢で捜索した。さらわれた人を発見しても魂の抜け殻みたいになっているので、左足で三度 蹴らないと正気に戻らない。間違って右足で蹴ると、その人は死んでしまう。

このほか、仲西を呼んだ者は憑りつかれたり、連れ去られて神隠しにあってしまうという怖い話や、裸になって尻にある一つ目を光らせて脅かすという、尻目(妖怪)と同一視された話も伝わる。

***洗骨とは**

墓地で一定期間経過した遺骨を取り出し、洗い清める改葬儀礼のことで、沖縄の葬制を特色づけるもの。行う時期は地方によって、また家々によって一定していない。

しかし、全島的にその時期は主に①②であることが多い。

①死者が出た時に洗骨する。

沖縄の墓は、村墓、模合墓、門中墓、兄弟墓、家族墓などいずれも共同使用なので、前の遺骸は処理しなければならない。シルヒラシ(墓の中で棺を安置する場所)に安置された遺骸を移動させるわけで、この際に単なる移動ではなく、多くは清めの手続きを踏んでやっている。死体が完全に白骨化しているのが前提であるが、たまたま期間が短く、十分に腐食していなくても必ず洗骨しなければならないとする地方もある。

②白骨化を待って洗骨する。

これは死者が出て、もし前の遺骸が新しい場合には墓を開けることはせず、仮墓を造って葬るといふ地方が多い。ふつう1年未満だと洗骨しない。3~7年のあいだに行うのが多い。

19	* 活用支援	
20	* 利用分野	
21	* 改善結果	
22	* 処理プロセス	
23	* 関連資料 2	